

KANTO GLOCAL

グローバル関東

Vol.1 January 2008

Special Issue
これからの東京

JCCA
関東支部

TOKYO OF THE FUTURE

これからの

東京

特集

Special Issue

日本の政治経済の中心地であり、人口密集地でもある東京。ミシュランで150店が星を獲得したかと思えば、江戸開府以来の文化が息づく街でもある。

これからの東京はどう変わり、私たちにどんな表情を見せてくれるのでしょうか。

東京五輪構想や新東京タワーなどの新しい計画を契機に東京のこれか
らを探りたい。

KANT GLOCAL

グローバル関東

Vol.1 January 2008

CONTENTS

- 02 MESSAGE 東京への想い
- 04 座談会 東京五輪への機運
- 12 特集1 新東京タワーによる街づくり
- 16 特集2 次代に残したい東京の魅力
- 18 坂東の原風景
- 20 LOHASな土木
- 22 業務インタビュー 技術人に聞く
- 24 関東支部活動紹介／事務局だより
- 25 編集後記／広報委員からのメッセージ

東京への想い

早稲田商店会会長（衆議院議員） 安井 潤一郎

私は昭和二十五年の二月の早生まれです
から、いわゆる団塊の世代の最後方に位置
しています。戦前、戦中はもちろん戦後の
餓えた時代の記憶も実感として持っていま
せん。しかし、あと数年で還暦を迎える東
京生まれ東京育ちの私が、この五〇数年間
で東京が一番大きく変わったと思うのは、
間違いなく昭和三十九年の東京オリンピッ
クの年だったと思います。

それまでは都心を車で走っていてもガタ
ガタ上下に揺れましたし、遠足に行く子供
たちの心配は「バスで酔ったらどうしよう」
で、トラベルミンという酔い止め薬が携行
必需品でした。

私の地元の早稲田に一番近い山手線駅
「高田馬場」は駅前通りを一本裏に入っただ
けで、道路の舗装すらされていませんで
した。高田馬場駅前が特別酷かったのでは
なく、今は大ターミナルになった池袋駅の
西口駅前でさえ雨の日は履いていた長靴が
脱げてしまうようなぬかるみだったことを
覚えています。

世の中は、有る一点がポイントになり大
きく、そして劇的に変化する事を知りまし
た。所得倍増計画等の政府の施策も有った
のでしょうが我々団塊の世代にとって、過
去を振り返った時、あの東京オリンピック
こそがこの国の社会資本整備に拍車をかけ
た大きなポイントであったと思います。

まだ開催が決まったわけではありません

が、今、誘致活動に本腰を入れようとして
いる二〇一六年の東京オリンピックに我々
は何を期待するのでしょうか？

現在の東京の道路を走ってもデコボコは
感じません。もちろん高田馬場どころか多
摩地域の市街地、住宅地でも雨で道路がぬ
かるむ所は稀です。相当な雨降りでもゴム
長靴を履いての通勤、通学風景は見なくな
りました。

しかし、全く問題ないのかといえそう
ではありません。ここ十年近く夏の東京の
雨の降り方はまるで南方のスコールのよう
です。それなのに、雨水を安全に処理でき
る一時間の降雨量設定は五〇ミリでしかあ
りません。数年前には、新宿区の落合で自
宅地階のエレベーター内で亡くなられた方
もいらっしやいますし、中野富士見町の妙
正寺川の氾濫や池袋のビックリガード下で
車が水没したのは、ついこの間の出来事デ
す。環状七号線道路下には、遊水池が出来
上がりましたが、そこで溜めた水を東京湾
に直接流し込む工事は現在のペースではま
だ相当の時間がかかるようです。

また、昭和三十九年のオリンピック以降
に出来た高速道路は老朽化して行政担当者
はそのメンテナンスに追われているのが現
状です。当時に比べて圧倒的に車両台数が
増えたにもかかわらず、都心部を通過する
ためだけの車両を分散させる三環状線の工
事も遅々として進んでいません。

今、世界が一番危機感を抱いている地球

温暖化問題。これは、喫緊の課題です。ハ
イブリット車や電気自動車が増えておりま
すが、そのスムーズな通行も求められます。

私は平成十七年の郵政解散のあの総選挙
で衆議院議員になりました。選挙直後は
「何にもしないのに議員になった運の良い
スーパールの親父」とマスコミに取り上げら
れましたが、選挙に出させていたたく前、
五年間で全国七〇〇ヶ所の商店街、商工会、
商工会議所を視察見学させていただきました。
平成十九年四月までは地元早稲田商店
会会長を十五年間務めさせていただき、環
境活動、震災対策、高齢者のコミュニティ
作り、障害者の就労支援対策等の「まちづ
くり活動」を先頭に立ってやってきました。
その経験から、この国には、都市と農山
漁村の共生と対流が起こり、経済面だけ
でない第二の高度成長が起こると確信してい
ます。その変化は昭和三十九年に東京の街
が大きく変わった時と同じように、急激な
もので、二〇一六年の東京オリンピックは
そのきっかけになるかもしれません。

しかし、新たな成長のためには、膨大な
エネルギーが必要です。そのためには日本
が元気でなくてはなりませんし、その先駆
けである首都東京はさらに元気でなくては
ならないのです。新しい変化のために必要
なことは、日本が、東京が、まち場が、そ
して私たちが、もつともっと元気になるこ
となのです。



安井 潤一郎 プロフィール
(やすいじゅんいちろう)

一九五〇年二月十九日 東京都新宿区生
まれ。早稲田中学、早稲田高校、早稲田
大学に学んだ生粋の早稲田っ子。家業の
食料品スーパー稲毛屋に入社し、一九八
一年代表取締役、一九九三年早稲田商店
会会長に就任。環境を切り口とした商店
街活動に取り組み、商店会の夏枯れ対策
「エコサマーフェスティバルイン早稲田」
を開催。早稲田大学周辺の七つの商店会
によるユニークな、「ごみゼロ実験」に取り
組み、「ごみからまちおこし」として注
目を浴びる。空き店舗対策と環境対策を
ジョイントさせた施設「エコステーション
商店会情報発信基地一号館」を行政の
補助金ゼロで開設し、各地の商店会に影
響を与えた。「ごみ減量リサイクル」が
「まちづくり」へと進化し、定住人口が
増加という奇想天外な「まち場」の活動
を展開中。

荻原——若い人たちが先頭を切ってくれるのは嬉しいですね。

原田——直感的に今の東京に必要なものというのが彼らの中にあると思うのです。それをうまく形にすればいいだけなのですが、いろいろな要因が絡まってうまくいっていないだけなのです。

柴田——私たちはこれから全国を車で回るキャラバンをやると思っています。車で全国各地を回って、静岡県では富士山清掃活動に参加してみたり、琵琶湖では水質調査をしている学生団体と一緒に未来を考える座談会をしたり、未来のアスリートと競争する企画もあります。オリンピックを機会に、一緒に未来を考えてくれる仲間をつくれればいいかなと思っています。

司会——ホームページを見見すると、企業がスポンサーになったり著名人が賛同していたりと、その行動力に驚かされますが。

柴田——スポンサーは団体についてしまうと活動に制限があっても困るので、毎回単発です。OBやOGの方にも協力してもらって、あれだけのことができているのです。私たちが一番広がりを実感しています。

オリンピックの裾野

荻原——オリンピックをすると、いろいろな物が残ります。例えば、長野では一校一国運動をやりましたが、長野以降、どのオリンピックでもやるようになりました。あれは受け継がれて、いい文化をつくっています。この間、トリノに行ったときに、ある学校を訪ねました。一校一国運動で日本を取り上げてくれた学校に行ったのです。みんなそれぞれのクラスが日本について勉強してプレゼンをするわけです。例えば天照大御神など日本の起源について調べたりするのです。おそらく日

思います。

原田——東京に、例えばマジソンスクエアガーデンみたいな、ボクシングからバスケットからアイスホッケーから全部できる、そういう建物をつくれれば多分うまくいくと思うのです。でも誰も一步を踏み出さない、前例がないというところで止まってしまっています。スポーツのコンテンツビジネスと施設建設を一体として考える議論がなかなか煮詰まらないのです。

荻原——日本では、スポーツのクラブ対抗といっても、なかなかサッカーのように地域に根ざしたチームは今までなかったですね。今までは実業団を中心をやってきたのですが、これからは野球でいえば四国リーグのような地域対抗の構図がどんどん盛んになってくれば、「オラが町のチームを応援したい」ということになります。これから時間をかけてじっくりと醸成させていくことによって、もっとスポーツに対する熱気を高められるのではないかと思います。

原田——今日は企業スポーツが下火になり、逆に地域のプロスポーツや地域スポーツクラブが伸びていますので、ちょうど転換期なのです。東京は、あまりにも器が大きすぎて、それが見えにくいところがありますね。

荻原——あとは、ロンドンももちろんですが、東京が実現すれば、より高度なセキュリティが求められると思うのです。ロンドンをさらに上回るようなセキュリティ体制、それもガチガチにするのではなく、チケットを持っている人が本人かどうか、から始まる万全のセキュリティ、それを障害と感じせずに実現する新しいセキュリティシステムを日本はつくれるのではないかと思うのです。僕もオリンピックをやるたびに、セキュリティの煩わしさを味わいました。あの煩わしさはともいやすね。長蛇の列、バックの中をいちい



■64年のレガシー、国立代々木競技場



■一校一国運動で始まった交流は今も続いている



■いよいよ始まった学生の会の全国キャラバン



原田 宗彦

早稲田大学教授



荻原 健司

参議院議員
元オリンピック選手



柴田 祐香

2016年東京オリンピックを望む
学生の会 副代表



梶原 洋

東京オリンピック招致本部 参事

本のことを初めて勉強したのだと思いますが、彼らの心の中には大きな財産が残ったと思います。

また、長野に世界中の選手や応援の人たちも来ます。そのとき泊まらない人たちが民家に何とかお願いして泊まるわけです。そこから草の根レベルで国際交流が始まります。今でも文通していたり、訪ねてきたり向こうへ訪ねたりということが実際に行われています。

柴田——オリンピックは二週間くらいのスパンでやるので、選手の方々がそこで生活することになります。サポートする側も、一緒に同じ雰囲気を楽しむ同じリズムで生活をするわけです。それによつてお互いに得られる物は大きいと思いますよ。

原田——オリンピックのレガシーと言えば、箱物もあります。日本で今一番問題なのは、コンテンツの弱さなのです。体育館をつくっても、それを満員にするコンテンツがない。ようやくプロバスケットが始まりましたが、それをアンカーテナントとして使うなど長期的な視野に立ったビジョンがないから、こんな箱物をつくってどうするのか、という話になるのです。

ですから、まず必要なのはスポーツ振興です。冷たい鉄板でいいお肉は焼けないです。やはり鉄板を温めておかないと料理ができない、そこが弱いのです。スタジアムを建て替えても、「えっ、陸上競技？」という話になります。そこにJリーグのチームを持つてくるなどすればいいと思うのですが、今の東京は残念ながらそのような絵が描きにくいのです。

梶原——スポーツ人口や競技スポーツの種類が変わらないものとして、同じバイの取り合いになっているのだと思います。スポーツを振興し、トップアスリートも、草の根のスポーツ人口も増やしていくという発想で、考えていくことが必要だと

ち開ける。

柴田——そういう意味では日本の最先端技術が使えるそうですね。

原田——招致活動がさらに煮詰まってくると、オリンピックに関係した様々な研究会活動が広がる可能性があります。私が大阪の招致活動を手伝ったときも、いろいろなところでそういった研究会が生まれて、その中にはセキュリティ部会なども実際にありました。

荻原——環境というテーマも当然ありますよね。日本は環境技術が非常に優れています。今、京都議定書で環境技術問題がありますが、東京は今名乗りを挙げている都市の中では一番環境を打ち出しています。世界中でトヨタのプリウスが売れています。東京オリンピックのときは、クリーン自動車しか走っていないかもしれませんね。

そうした意味では、僕らよりもっと若い人が多く出てくるべきなのです。ですから、あんなのをやったら、こんなのをやったらと、どんどん招致委員の方々にぶつけてみていくのも面白いと思います。計画ももうそろそろ完成すると思いますし、提出しなければいけない時期だと思っています。このような議論が、あつちの居酒屋でこつちの酒場で行われるようになれば楽しいのですが。

勝負の行方

司会——これから招致活動を進めていくうえでポイントになりそうなのはどのあたりでしょうか。

原田——招致活動というのは舞台の裾でやるようなものです。そこには外向きの招致活動と、支持率をどう上げるかという内向きのものと、その二点があります。

荻原——最近思ったのは、直前の土壇場でどうす

るかということです。この間、冬の二〇一四年のオリンピックをロシアのソチが取りましたよね。僕はどう考えても韓国のピョンチャンかオーストリアのザルツブルクかどちらかだろうと思っていました。ところが、ソチが突然立候補してきて、まさかそれはないだろうと皆が思っていたのですが、結局ソチが取って行っちゃいました。いったい何があったのか、プーチンさんが現場に乗り込んでいって「ウチに任せろ、いいオリンピックをやるから」とプレゼンをやったのです。本当に最後の最後の土壇場までどうなるか分からないのが、今の招致活動だと思います。

梶原——プーチンさんの前はブレア首相がプレゼンをして決まったと言われていますね。土壇場で圧倒的な知名度を持つ人が、流暢な英語でプレゼンをするとしたら、日本としても、どういうやり方をすればいいのか十分考えることが必要です。

荻原——難しいですね。プレゼン力も相当に鍛え上げていかないとイケないですね。やることは山ほどあります。でも、まずベースは固めたいですね。

原田——東京には、どんなものがあるかでしょうね。世界になくて東京にあるものをもっと徹底的に洗ったほうがいいですね。国内支持率を上げるような活動を学生の会でやるのもいいのですね。堂々と言いたいことが言えますし。

梶原——東京には、平成十八年十二月に出した計画、「十年後の東京―東京が変わる―」があり、海外の人からは、非常に良くできていると評価されています。海外へのアピールとして、東京のプランを全面に出し、二十一世紀の新しい都市モデルとして訴えていきたいと考えています。

柴田——私は、密室でやるよりも、表に出て訴えかけるとか人の目に触れるような見せ方をこれか



■東京タワーの申し出により行われたライティング

らどんなしていかないと伝わっていかないと思います。招致横断幕みたいなものを、都庁の前にはいっぱい掲げてありますが、普通の街中にはありません。街全体で人の目に触れるようなものがあるといいと思います。

梶原——残念ながら、計画の内容はまだ公にはできないのですが、国内のPR活動は積極的に進めているところですよ。

原田——東京タワーは今、招致活動を応援するライトアップをしていますね。

柴田——都営地下鉄にはポスターも見られるようになってきましたね。

梶原——バスラッピングもやっています。

荻原——石原さんは衆議院議員の選挙のときに、日の丸付きのブレザーを着て選挙活動していた時がありました。そのくらい好きなのです。

あとは、東京から全国にジワッと広がると思います。 「東京でしょう、あれをやっているのは」となってはいけません。長野のときを振り返ると、長野市は盛り上がりつつありますが、松本市では「あれは長野市でやっているのですよ」と、同じ県内でも温度差があったという話を聞きました。やはり東京から全国に波及していかなければいけないと思います。

柴田——荻原さんがおっしゃった全国への波及という部分で、日本全国で盛り上げたいというのはあります。国内でも東京がひとり勝ちしてしまう雰囲気がある中で、市民が歓迎して国民が歓迎して、みんなのオリンピックだという認識をもっていけたらと思います。

都市とスポーツの躍動
司会——オリンピックが来たら、日本は、東京は、変わると思えますか。

柴田——「最近の若い者は」とよく言われますよね。そのように悪い若者の印象を持たれない世代にしていきたいし、二〇一六年がきたら私は三十歳前ですが、その頃の高中生や中学生たちに力を外向きに発散する、うまく情報発信していく若い世代になつてもらいたいと思っています。

荻原——もうこの世代は僕らの想像を超えて、いろいろとしてしまう世代ですよ。例えば、会社に就職した方の三割四割は「この会社に入ったけれど合わない」と辞めてしまって、若い人たちが集まって新しいビジネスを起している世代だと思います。特にIT分野などはそうした若い力が集まっています。若い人には、僕らが考えられないことをどんどんやつてもらうのが一番いいと思うのです。

荻原——僕がオリンピックに期待するのは、仕事柄というわけではありませんが、スポーツ振興です。スポーツ振興のひとつの大きな起爆剤にしていききたいと思うのです。先ほど、底辺の拡大、底辺をしつかり固めていくという話がありました。底辺を広げるためには頂点がドカンと爆発していなければダメなのです。「イチローになりたい」「松井になりたい」というものが無ければ、底辺拡大はないと思うのです。底辺を拡大することによって頂点があるのではなく、頂点が強烈に輝いていることで、底辺が拡大していくという形を僕は期待しています。

やはり目の前で世界の一流プレーヤーの競技を見たことによって、やればできるのだ、自分もあなりたい、自己実現をしたいという気持ちです。スポーツではなくても勉強でも何でもいいと思うのですが、やはりオリンピックを見た人が「よし、何か自分もやってみよう」「やるぞ」「あのようになりたい」と思うきっかけになってくれたらいいと思います。



■丸の内で行われ観戦者の度肝を抜いた東京ストリート陸上 ©東京ストリート陸上実行委員会

それと、スポーツのある生活を日本中の人がしてくれたらいいと思います。それは、今は高齢社会で、医療費もかかります。みんなにもっと運動してもらって、いつも元気になってくれるのが一番いいのです。ぜひオリンピックに来てもらって、いろいろなエネルギーを与えて欲しいなと思うのです。

柴田——この間、丸の内ですトリート陸上というのがありましたよね。そのときまたま招致委員会のブースを出すので手伝いに来てくれと言われて、私は徹夜で行きました。体調が優れないせいもあり、「どうなのかな、このイベントは」という不安がありました。でも、アスリートとハードなビルとの組み合わせがすごく、丸の内に子供たちが団体で来ていて、それが私には新鮮な景色に思えて感動して「これはいいな」と思ったのです。丸の内の陸上はいいかもしれない、このまま定着させればすごいイベントになるかもしれないと思います。

東京も二十三区だけではなく市や島もあるのです、いろいろなところでやる。例えば、柔道は雷門の前ですトリート柔道などと街中でイベントをやって、そのイベントのために地元のおじいちゃんたちが頑張ってくれたり、差し入れを持ってきたりして盛り上がりつつくるのではないかと、思っていました。

荻原——いいのではないですか。街のあちこちでいろいろなイベントをやって、ストリートバスケットのようなことをその辺の道路を遮断してやるなどというのはいいいと思います。

柴田——そのようなイベントもやりつつ、招致活動も運動させていけば、成果もついていくのではないかと思います。

司会——ストリート陸上は、テレビのインタビューに答えている人がみんな半分興奮状態で、「す

ぐ目の前で、陸上つてすごい」などと言っていました。あれは実際に見てみないとわからないのかもしれないですね。

原田——走り高跳びでバスの高さを超えるのですね。そんなのを実際に目の前で見ると、すごいことですね。

荻原——都市の中での肉体の躍動は意外性があって面白いですね。日本ならではの感じがします。

招致活動のレガシー

原田——招致活動にはとても意義があるのですが、その見せ方がまだうまくいっていません。お金をドブに捨てるようなイメージがありますが、本当は違います。招致というレンズを通して東京がどう変わるのか、科学技術はどう発展するのかという招致のレガシーに目を向けなくてはなりません。

梶原——我々には、オリンピックをやるう、あるいはオリンピックが来る来ないに関わらず「このように東京を変えていきたい」という思いがあります。オリンピック招致を契機に改革の取組が加速し、その意義は多くの人たちに広がっていくと思っています。

原田——もちろん勝ち取ることが最優先課題なのですが、勝負は時の運といえます、招致そのもののレガシーに目を向けることも大切です。多分招致費用は五十、六十億円かかると思います。でもそれを上回るプロモーション効果はあります。

多分二〇〇九年あたりから、ヨーロッパの田舎の町のラジオから南アメリカの新聞まで、東京という名前があらゆるところで出ます。その効果を考えると、名乗りを上げるだけでも意味がある。また、大阪オリンピックを手伝った立場で言う



■今でも脳裏に残る64年の東京オリンピックの名場面、円谷選手。



会に出ました。でも、やはりオリンピックはいいですよ。アスリートにとってもその日にプレーするために四年間ずっと精進してきて、二度と戻らないわけです。オリンピックに限りませんが、そこに向かってかけた情熱であるとか、結果の善し悪しは別として、そこに自分が出場して戦えたということは大変な財産として残っています。

その一方で、そういう選手を家族や地域やサポーターが支えますが、彼らと同じ気持ちで共有することができない。同じ燃えるような気持ちで、やる人も応援する人も見る人も思いを共有できるのはオリンピックならではと思うのです。そういうものはお金には換えられない価値だと思います。

野口みずきさんや高橋尚子さんが金メダルを取ったとき、日本中が湧きましたよね。あの感動は、相当なことでもない限りありません。日本中があれだけ盛り上がりつつ喜ぶ、あるいは元気づけられることは、オリンピック以外には、なかなかないのではないかと思います。そのような眼に見えない価値、心に残るものをもう少し見出してほしい気がします。

梶原——世界の中でオリンピックの視聴率が一番高いのは日本だといわれています。長野大会の時も、皆さんは、その感動を職場でも学校でも次の日に話したと思います。また、朝テレビをつける毎日オリンピック中継をやっていました。六十四年大会も知っていますが、丁度テレビが普及したばかりで、家でも学校でも、みんながテレビを見ていました。私が一番覚えてるのは円谷幸喜選手です。こうした話は、同時代を共有した者同士の共通の話題になります。レガシーというのは何も建物だけではありません。その時に生きた同時代の人間が一つの話題を出すだけで、全く違う環境で育っていても、会話ができます。このような経験はなかなかないと思います。

オリンピックは偉大なる触媒です。そのオリンピックをまた目の前でやりたい、みたいと思います。

荻原——僕はやっぱりみんなで夢を見たいのです。確かに皆さんの税金が使われるわけですから、「そんなお金がかかるなら、オレは見たくはない」という人はいるかもしれません。でもお金はかかっても、目に見えないさまざまな効果が詰まっているということとを今日の皆さんのご意見の中に感じました。それらを一言で言う、僕はやはり夢ではないかと思えます。夢は見ているだけではなく、実現させるべきものだと思えます。そういう意味で夢を見させてもらいたい、そしてそこに立ち会いたいと思っています。

原田宗彦（早稲田大学教授）

一九五四年大阪生まれ。京都教育大学卒業後、ペンシルバニア州立大学体育・健康・レクリエーション学部博士課程修了。鹿屋体育大学、大阪体育大学を経て現職。専門はスポーツマネジメント。大阪オリンピック招致に関わり、国内外のスポーツイベントとまちづくりに精通している。大学で教鞭を執る傍ら、Jリーグの経営諮問委員会の委員をはじめ、数々の要職を担う。

荻原健司（参議院議員、元オリンピック選手）

群馬県草津生まれ。ノルディック複合の選手として長年に渡り世界のトップアスリートとして活躍、オリンピック団体戦で二大会連続金メダル獲得、ワールドカップ個人総合三連覇などを含め通算十九勝という前人未到の成績を収めた後、二〇

と、私は事務局は三十以上という票を予測していましたが、見事に六票しか取れずに負けてしまいました。しかし、それは後の世界陸上につながり、現在何が起きているかと言うと、関西経済同友会にあった観光委員会という組織が、大阪スポーツコミッション委員会に名前を変えて、大阪に定期的にスポーツイベントを誘致するそうです。アメリカやヨーロッパにあるスポーツコミッションという、都市をスポーツで活性化するための組織と同じです。大阪オリンピックは敗れましたが、招致のレガシーは今に受け継がれているのです。負けたらゼロではないのだということも理解して、東京のシテイセールスにしっかりと結び付けようという発想で招致活動をやるといいと思います。

柴田——招致のレガシーというのは今日初めて気付きました。

原田——もちろん取るということが最優先課題ですが、そのことをもっと強調してもいいと思いますね。

梶原——勝つための戦略に近道はないと思っています。今できることは、まずIOCに評価される質の高い計画をつくることです。その上で、戦略をもってプロモーションを行っていかねければなりません。

また、行政だけではなく、市民の皆さん、学生の皆さんが応援してくれないと絶対にうまくいきません。

原田——みんなのオリンピックにしていけないとうまくいかないと思いますね。

オリンピックは格別

司会——スポーツイベントはいろいろありますが、やはりオリンピックは特別なのでしょうか。

荻原——僕は世界選手権をはじめいろいろな競技

〇二年に競技生活を引退。スキースポーツの持つ素晴らしさ、感動を知ってもらいたいという熱い想いから、引退後は子どもたちにスキーの楽しさを教えたいとボランティア活動などを積極的に行う。二〇〇四年七月、参議院議員選挙 全国比例代表区で初当選。スポーツ振興や教育問題、環境問題に力を注ぎ活動中。

梶原 洋（東京オリンピック招致本部 参事）

一九五九年鹿児島生まれ。一九八二年東京大学卒業後、東京都庁入都。福祉局、総務局、経済企画庁、衛生局、福祉保健局等を経て、平成十八年十月から現職。

柴田 祐香（二〇一六年東京オリンピックを望む学生の会 副代表）

一九八七年東京都生まれ。都立日比谷高校を卒業、現在早稲田大学スポーツ科学学術院在籍中。東京にオリンピックを呼びたいという想いのもと、大学の垣根を越えて集まった学生たちの団体「二〇一六年東京オリンピックを望む学生の会」で副代表を務める。

司会 浅野泰弘（社）建設コンサルタント協会
関東支部 広報委員会副委員長

新東京タワーによる街づくり

田中 哲（墨田区議会議員）



■写真1 2011年度、完成予定の高さ610mの新タワー

六〇〇mを超える新東京タワーを建設

「ALWAYS三丁目の夕日」という映画が大変な人気になっている。映画の中では、昭和三十年代の東京タワー建設の懐かしい映像が映し出され、あの時代の象徴とされている。一方、六〇〇mを超える新タワーが墨田区押上に建設される事になった。平成の新しい時代のタワーによりすみだの街は、どうか変わっていくのか。いま、もう一度考えてみるべき必要があるのではないだろうか。シンクタンクのレポートによると、新タワーにより、年間四七三億円の経済効果が期待できるとの試算が纏められ、来訪者も五〇〇万人を超えると思われているが、訪れてみたい街とはそこに住む人にとっても魅力ある街でなければならぬ。新タワーが、地域のシンボルとして住民にとって誇りとなるようにならなければ、新タワー誘致に成功したと言えないのではないかと考えている。

まち歩きから始める観光振興プラン

墨田区には、関東大震災・東京大空襲の際に被災された方々を祭る東京都慰霊堂を始め、相撲の野見宿禰神社や怪盗ねずみ小僧の墓がある回向院、旧安田庭園、さらに勝海舟・榎本武揚・徳川家康像など歴史や文化を感じる施設が多く偏在しながら、こういった史跡を内外に充分知らしめる機会が乏しかった。また、歴史を思い起こさせる町名が多くあったが、高度成長期に効率性を追求する為なのか、無意味な住居表示の変更をしてきた様に思える。京葉道路を回向院に歩いて行くと、本所松坂町跡という立派な石碑が建っている。司馬遼太郎の「街道を行く」の中にも、本所松坂町・吉良邸跡の記載があるが、ここには吉良を討取った後、浪士が首を洗ったと云われる井戸を地域の保存会の人達が再現した小さな公園があるが、せめてこの公園だけでも本所松坂町に戻すことができないものであろうか。



■写真2 東京都慰霊堂

街の名は文化を表すものである。地図に載り、実際の地名があれば、それだけでも、街歩きの楽しみになるはずである。是非とも粋の薫る町



■写真5 本所松坂町公園



■写真4 勝海舟誕生の碑



■写真3 回向院

名を復活すべしと考えている。

携帯電話やハイビジョン等のハイテクを駆使した史跡を表す誘導サインや案内板などを設置すれば、地域の歴史に誰でも簡単に接する事が出来る上、日本の技術を内外に示す事もできるのではないだろうか。

さらに、観光の核として大きな期待を寄せたいのが日本相撲協会である。巨人・大鵬・卵焼きという言葉があったが、私の子供の頃の力士は憧れであり、子供が二人集まると相撲をとって遊んだものであった。残念ながら不祥事続きで昔日の相撲人氣は見る影もなくなくなってしまったが、触れ太鼓・相撲甚句・ちゃんこ鍋、伝統文化である相撲を、もっと街づくりにも使えないものだろうか。

逆に、相撲協会の積極的な行政や観光施策への協力も不可欠と考えている。

ホスピタリティ溢れる人情の街

観光の集客に際しては、特にターゲットを中学・高校の修学旅行生と元気高齢者において街づくりを行うことを提案したい。

修学旅行にとって墨田区は、西に浅草、南にお台場、さらに浦安の東京ディズニーランドにも近く、半蔵門線を使えば若者に人気の表参道や渋谷へも直通でアクセスできる。墨田区は治安が良く、もてなしの心、ホスピタリティの溢れる街である。

また、元気高齢者には、江戸東京博物館・建設予定の北斎館を中心に

小さな博物館をめぐる『安い・近い・簡単』をスローガンに工房ショップでのものづくり体験や忠臣蔵・鬼平犯科帳等の江戸文化をめぐる街歩きを推進すれば、墨田区特有の人情味溢れるふれあいが生まれ街が活気づくはずと考えている。



■図1 新タワー建設地

東京オリンピック マラソンコースへの働きかけ

現在、東京都が二〇一六年のオリンピックの開催を目指している。考えてみると、現在の東京タワーができたのが昭和三十三年、東京オリンピックが開催されたのが、その六年後の昭和三十九年であり、図らずも新タワーの開業が二〇一〇年とされているので、現東京タワーと同じく、新タワーの建設の六年後には世界的イベントのオリンピックが開催される可能性がある。

計画案では、メインスタジアムを中心にコンパクトな大会にする方針

の様であるが、中央区晴海にメインスタジアムが建設されるのであれば、マラソンのクライマックス、三十五km過ぎのデッドヒート地点が新タワーから錦糸町を抜ける四つ目通りになる可能性も十分にあるのではないだろうか。浅草雷門を抜けて吾妻橋から隅田川を渡り、新タワーの下を選手が駆けていく姿を想像するだけでも、心躍る気がするのである。東京は昭和三十九年の東京オリンピックで大きく変わった。私も子供ながらに清澄通りの旧墨田区役所前を駆け抜けていった聖火リレーの姿を鮮明に覚えている。区としても積極的に東京都に働きかけ、マラソンコースの変更を求めるべきだろう。

隅田川水辺空間の再整備

墨田区の基本構想は、「水と歴史のハーモニー」人が輝くいきいきすみだ」である。この基本構想審議会やワークショップでは、隅田川の重要性、水辺空間に対する区民の熱い思いが議論されている。母なる川・隅田川は、首都東京の最大の観光資源でもある。並行して行われた隅田川水辺空間等再整備構想策定委員会では、高速道路の地中化の議論も行われている。既に、韓国ソウルの清溪川（チョンゲジョン）や米国ボストンでのビッグディックでは高速道路の地中化が実現しており、日本でも日本橋の上にかかる高速道路の撤去は世論の後押しを受けており、勿論、国家的プロジェクトであり、一朝一夕に計画が進むとは思え

ないが、将来に向けて区民を巻き込んで、より大きな世論にするべきではないかと考えている。

加えて墨田区の内部河川は、非常に汚く忘れられた存在になっている。新タワーのお膝元である北十間川にはカミソリ堤防が切り立ち、水辺に親しむ状況には程遠い。北十間川は、新タワーから浅草に抜ける墨田区の横軸のラインであり、是非とも、内部河川整備を強く求める必要がある。

隅田川に鮭や鮎が泳ぎ、北十間川にホテルが飛び交うような街になったら、どれだけ嬉しいだろうか。



■図2 新タワー水辺拠点ゾーンイメージ

新タワーの問題点を考える

ところで、新タワーによるメリットだけではなくデメリットについて

では、思い切って新タワー周辺への車規制を考える必要があるのではないだろうか。環境の為に、多少の不便さも時には必要なのではないだろうか。これからの時代は、環境を第一に考えるべきと認識している。

今回のタワー事業は、デジタル放送用の電波塔としての役割だけではなく、いわゆるモバイル、移動体通信上も計り知れないメリットをもたらすはずである。ワンセグを利用した自動車のカーナビシステムやテレビの搭載は当たり前であり、近い将来にはすべての携帯電話にもテレビが標準装備されるようになると考えられる。いわゆるユビキタス社会に向けて、デジタル電波は最低限必要な社会資本なのである。さらに、新タワーにより災害時の情報の受発信を始め、現代版火の見櫓として災害対応の向上にも大きな役割を果たすのは間違いないはずである。



■写真7 首都圏地上デジタル放送の電波塔となる

も考えねばならない。風害・日照権、さらには電磁波が人体に与える影響はどの程度予想されるものだろうか。また、地震に弱いと言われるこの地域に、もし大地震が起こった場合、タワー倒壊などの危険性はないのであろうか。電磁波や風害・日照権については、環境アセスによって周辺環境に充分配慮するので、大きな問題にはならないだろう。また、地震の際の危険性だが、むしろタワーの倒壊の可能性より、震災時に大きな目印となり、帰宅困難者や、火災に際しての避難の目標になり肯定的に捉えて良いと考えている。

そうすると、交通渋滞と住環境の問題が最大の懸案となる。残念ながら墨田区内における東武鉄道の高架化が大変遅れており、大きなバリアになっている。タワー予定地の裏には、大踏切と呼ばれる線路が未だに残っている。平成十六年の竹ノ塚駅近くの踏切で歩行者四人が死傷した事故も記憶に新しい。五〇〇万人もの人が集まる新タワーのすぐ裏手に開かずの踏切があれば、交通渋滞は避けられない。一刻も早い対応を求めたい。

もう一つの課題は住環境の問題である。タバコやゴミのポイ捨てや、或いは、車の排ガス等による環境対策をどう担保していくべきなのであろうか。墨田区でも、いわゆるポイ捨て条例を制定してから、大変マナーが良くなっているように思うが、場合によっては、一層の強化が必要となるのではと考えている。また、交通渋滞と排ガスなどの問題に関し

新しい地域ブランド

墨田区はこの新タワーを起爆剤に大きな変化を遂げなければならぬ。本来、墨田区はものづくりの街である。将来にわたり、このものづくりの伝統は守るべきである。しかし、産業構造が変化する中において、第二次産業から第三次産業へ業態の変化が訪れるのは仕方がないことではなからうか。

街を変える為に、もしも、タワーに登った人から一〇〇円の観光税を徴収すれば年間五億円、二〇〇円なら一〇億円の収入となる。これを特定財源として、街づくりの道路や河川の整備に使えば、生活インフラが充実して、区民が住んで良く、訪れて良い街を実感できると考えられる。観光とはそこに住む人の光を見に行く事であり、住んで良い街こそが観光すべき街ではないだろうか。



■写真6 日本の伝統美と近未来的デザインが融合

さらに墨田区の基本構想の骨子ガバナンス（協治）により、行政と区民、地域（特に町会）と企業が一体となって将来の街づくりを考えなければならぬ。最近のCSO（Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任）の考え方からもタワー建設主体である東武鉄道を始め、日本相撲協会の街づくりへの更なる協力を求めたい。

タワーのある街は今後大きなブランドと夢のあるイメージを創る。今までのすみだはこのブランドやイメージを上手く使えていなかったように思えてならない。誰でもが住みたい街づくりを目指して新しい地域ブランドを構築するべきである。新タワーや新たな水辺空間で新しい産業、すなわち観光を興すことは、墨田区の将来を担う重要な施策だと考える。そして、それは単に一地域だけの問題ではなく、より多くの波及効果が現れ、新しい東京を再生する最大のチャンスなのである。観光産業は今後、東京の経済をリードしていく原動力の一つになるであろう。その上で墨田区が大きく変わることを期待したいと考えている。

【写真提供】写真1、6、7、図1―東武鉄道株式会社・新東京タワー株式会社 図2―墨田区ホームページより

田中 哲 プロフィール

(たなか さとし)

昭和33年5月30日 墨田区菊川二丁目で生まれる

弥勒寺幼稚園

墨田区立中和小学校 卒業

墨田区立堅川中学校 卒業

東京都立墨田川高校 卒業

立教大学 経済学部 経済学科 卒業

明治大学 公共政策大学院 ガバナンス研究科 修了

国際証券(株) (現 三菱証券(株)) を経てソニー生命保険(株)勤務の後

平成15年 統一地方選挙にて墨田区議会議員 初当選

ファイナンシャルプランナー (AFP)



次代に残したい東京の魅力

石川 幹子（東京大学大学院工学系研究科教授）

地球環境時代の「庭園都市」へ

「庭園都市」としての江戸

江戸期には、様ざまの大絵図が描かれた。これらの絵図には、鮮やかに彩られた濠・池・河川・江戸湊等の水系と、社寺林・明地・田畑等の緑地が、きめ細やかに描写されている。江戸の都市構造のより詳細な姿は、近代都市へ脱皮する前夜の時代に、近代測量の技術を駆使して描かれた「参謀本部陸軍測量局・五十分一東京図」により推測することができる。全体の図副は三十六面、一軒一軒の家屋から、庭園、池、水路、樹種に至るまで精緻を極める。ここには無数の名もない庭園の連なりが描きだされており、まことに、江戸が庭園都市であったことが示されている。

庭園文化は、丹念に大地の特色を読み取ることにより成立する。この意味から、庭園を読み込むことは、江戸・東京、四〇〇年の軌跡のみではなく、数億年の大地の歴史がとぎだした東京の深層を掘り起こすことに繋がる。

文化の深層を掘り起こす

近代化の過程で、東京は、関東大震災と戦災により焦土と化し、ゼロからの出発を余儀なくされた。戦後の高度経済成長、バブル崩壊後の都市再生と、激動の時代を、今日もなお疾走している。立ち止まることが許されない巨大都市にあっても、それぞれの時代を切り開いてきた先人達には、夢とヴィジョンがあった。

江戸の夢、明治維新の夢、そして戦災から不死鳥のように立ち上がった復興計画の夢。なかでも戦災復興特別都市計画は、不燃都市という理想を「パークシステム型都市計画」に託し、かつ成長管理型都市計画の原型となる「緑地地帯」を二十三区外縁に導入した。

パークシステム型都市計画とは、公園緑地と水系を連続的に配置することにより不燃都市としての骨格を形成する考え方であり、全国各地の戦災復興都市にも導入され、それぞれの都市の骨格となっている。東京における戦災復興の理念と夢は、急

速な都市化の中で翻弄された。その挫折を論じるのは容易である。しかしながら、私は、江戸・東京、四〇〇年の大地に刻み込まれた庭園文化と、近代都市計画の軌跡の重層を読み込み、文化の深層を掘り起こすところ二十一世紀初頭、必要とされていることであると考える。

地球環境時代の庭園都市へ

今日、地球上のすべての場所で、地球環境の持続的維持のための具体的アクションが求められている。世界都市・東京は、率先して、この課題にチャレンジしていく責務がある。緑地に関していえば、世界に名立たる「低い緑地率」の東京を、まず、如何に緑豊かな空間に変身させていくかという課題がある。

この道筋は、江戸の庭園文化と、パークシステム型近代都市計画を重ね合わせるにより形成が可能であると考える。その基盤として、私は、次の三つの視点にもとづき実践を行っている。

視点1 水の道・玉川上水の復活と新しい水の文化の創出

東京の生命の要としての上水は、江戸期に開鑿された玉川上水であったが、現在では杉並区浅間橋より暗渠となり、わずかに下水再生水により命脈を保っている。玉川上水の復活は、新宿・四谷大木戸周辺において、環境省と新宿区、地域住民の皆さんの協力により、「内藤新宿分水」として、二〇〇八年、実施設計の運びとなった。地下にうずもれた上水を顕在化させることにより、隣接地に清涼な水と風、そして生き物の回廊を生み出すことになり、生命都市への回帰が実現することとなる。

視点2 「庭園文化型パークシステム」の創造

東京の都市構造の特色は、交通の要である主要な駅に隣接し、江戸に起源を有する巨大な緑地が存在していることである。東京駅と皇居（江

戸城）、上野駅と上野公園（寛永寺）、新宿駅と新宿御苑（高遠藩内藤家下屋敷）、高田馬場駅と戸山公園（尾張藩戸山山荘）、駒込駅と六義園、



■写真1 東京西北部における庭園文化型パークシステムのポテンシャル

王子駅と飛鳥山などである。駅と公園緑地間の回遊性の回復、都市再生のヴィジョンの検討は、今後の東京の未来を左右する重要なものである。

図1は、皇居を中心とし、「庭園文化型パークシステム」を再生し、世界都市東京としての顔を創り出すとする構想であり、NPO東京セントラルパークを中心として、活発な活動が行われている。

写真1は、皇居・半蔵門から新宿通り、新宿駅、高田馬場方面を包含するものであり、庭園文化の遺産が、現代に明瞭に継承されていることがわかる。早稲田大学に隣接する巨大な緑地は、戸山公園である。戦後の混乱の中で、様ざまの公共施設が立地し、その原型はわずかに箱根山、大泉水跡の戸山公園などに留められているにすぎないが、都市更新の時期を迎え、「庭園文化型パークシス



■図1 皇居を中心とする庭園文化型パークシステム



■図2 環境首都東京における庭園文化型パークシステムを基盤とする「水と緑の回廊」

視点3 海の自然の回復

江戸湊には、住吉神社が鎮座し、海辺に沿って多くの大名屋敷が汐入の池の構造を有する池泉回遊式庭園を営んでいた。その証左は、今日では、わずかに芝離宮と浜離宮に残るのみとなってしまった。しかし、浜離宮庭園を訪れば、常緑広葉樹であるタブノキが巨大な樹林となり、汐入の池は海の生態系を包含する生物多様性の宝庫となっている。汐留再開発は、もっぱら庭園文化の価値を景観的価値として借用するのみで、得られた開発利益を庭園文化の持続的維持に還元するルールが創り出されることはなかった。その事例は、超高層の林立による風の道の遮断、景観への配慮の原則の不在、人間のための浜離宮への安全な道の不在など、枚挙に暇がない。

一方で、汐留再開発が環境資産として高く評価した浜離宮では、資金難から再整備が長らく行われず、表層土壌の流出による樹木の衰退などが顕著であり、庭園空間の抜本的修復が必要となっている。

江戸以来の文化的資産が生み出す開発利益は、広く公共、そして文化的遺産である当該庭園に手厚く還元されるべきであり、「庭園文化型パークシステム」を実現するための開発利益還元元の仕組みにもとづく、財

政基盤の確立が必要である。

東京の持つ真の魅力を、江戸・東京四〇〇年の歴史におき、その中で形成されてきた水と緑のストックを、「庭園文化型パークシステム」として創出していくことが、重要である。世界に類例をみない「庭園都市・東京」の再生こそ、地球環境時代に東京が発信する明瞭なメッセージになると考える。

石川 幹子 プロフィール

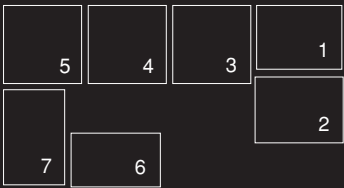
(いしかわ みきこ)
東京大学大学院工学系研究科教授
日本学術会議会員

東京大学農学部農業生物学科卒業、ハーヴァード大学デザイン学部大学院ランドスケープ・アーキテクチャ学科修士課程修了、東京大学大学院農学系研究科農業生物学専攻緑地学博士課程修了。
都市における水と緑の計画について、計画、政策のみならず、具体的な設計を市民参加により、実践している。





- 1 都心地区から名峰筑波山を望む
- 2 学園中央通り線 電線の地中化、広い植樹帯、整然とした街並みが本都市特有の景観を創り出している
- 3 空中写真 1947年【米軍撮影の空中写真（1947年撮影）】
- 4 空中写真 1972年【国土地理院撮影の空中写真（1972年撮影）】
- 5 空中写真 2005年【国土地理院撮影の空中写真（2005年撮影）】
- 6 「つくば科学万博'85」会場跡の一部は、現在、科学万博記念公園となっている。写真正面奥に、超大型テレビのジャンボトロンが設置されていた
- 7 ペDESTリアン（歩行者専用道路） 延べ48kmにもおよぶ



筑波研究学園都市は茨城県南部に位置し、科学技術の振興と高等教育の充実、東京の過密対策を目的に建設された都市である。都市区域はつくば市全域からなり、このうち二七〇〇haが研究学園地区として指定され、国の試験研究機関・教育施設、商業・業務施設、住宅などが計画的に配置されている。

筑波研究学園都市は、一九六三年の閣議了解によりその建設が決定され、一九八五年には「つくば科学万博'85」が現在の筑波西部工業団地にて開催された。現在の人口は約二十万人、国と民間合わせて約三〇〇に及ぶ研究機関と企業、約二万二千人の研究者を擁する我が国を代表する世界的な科学技術の拠点として成長している。

筑波研究学園都市の創造

このように、国家プロジェクトとして創造された筑波研究学園都市ではあるが、本都市の中心部となる研究学園

坂東の原風景

筑波研究学園都市

広報委員会 遠藤徹也

地区は東西六km、南北十八kmの範囲にわたって分散している。これは、本都市の建設に当たって、地元住民の生活や農業経営に対する配慮から既存集落や農地をできるだけ避け、平地林や原野を中心に用地取得が行われたからである。

三枚の空中写真は、研究学園地区の都心地区のものである。都市的基盤が全くない地から新たな都市が創造されていった様子がうかがえる。一九四七年の時点では、左下から一直線に北上する地方道に沿った集落が目立つくらいである。一九七二年は、公務員宿舍への職員入居が開始され、移転機関の第一号として無機材質研究所の移転が完了するなど、本都市が始動した時期に当たる。道路の骨格は現れてはいるが、都心地区に目立った建物は無く、都市の概成は八年後の一九八〇年まで待たれることとなる。二〇〇五年は、待望の「つくばエクスプレス」が開業し、筑波研究学園都市が鉄路によって

東京と直結された時期である。

先端的都市施設の導入

筑波研究学園都市は、我が国初の科学都市を造るという意気込みを以て建設されたため、自動車交通に対応した格子状の幹線道路、都市公園、集合住宅、小中高等学校等の公共・公益施設が整然と計画的に整備された。また、地域冷暖房、真空集塵、CATVの各システムが収められた共同溝、ペDESTリアンによる歩車分離などの先端的都市施設が導入され、これらは他の大規模ニュータウンの開発にも活かされることとなった。

筑波研究学園都市の今後

筑波研究学園都市の建設が始まって以来四十余年が経過した今、二〇〇五年のつくばエクスプレスの開通に続き、首都圏中央連絡自動車道の整備が進んでいる。今後、本都市が科学技術中枢拠点だけでなく、広域都市圏の中核都市として、さらには自然・歴史、最先端科学が調和する未来都市として新たな発展が期待される。

〈参考文献〉

『桜村史 下巻』桜村史編さん委員会
一九八三年
『筑波研究学園都市』学園都市問題研究会
一九八五年



「横浜市 和泉川」

広報委員会 浅野 泰弘



■周辺住宅にとっては最高の庭



■愛護会からのお知らせ



■橋のたもとで見つけた犬の足跡の花

二ツ橋には、「和泉川水緑のウォーク」と書かれた案内ボードが設置されていて、宮沢遊水地までの概要が分かるようになっています。みどころの表記もありますが、これはちょっと寂しいかもしれません。むしろ、「愛護会からのお知らせ」に揭示されているリーフレットが気になります。実は和泉川の整備は、市民協働で行われており、その維持管理も自治会などを中心に行われた水辺愛護会が、年一回の清掃、年二回の除草などを行っているのです。川沿いには多くの住宅が見られますが、家のすぐ脇をこんな川が流れていたら最高でしょう。みなさん自分の庭のような感覚で維持管理を行っているのかもしれない。

誰もが感じる心地よさ

和泉川は東山の水辺、関ヶ原の水辺、寺の脇の水辺、宮沢遊水地と続いていきますが、それぞれ変化に富んでいて、寒い時期に訪れましたが、犬の散歩をしている人、ジョギングしている人、ベンチでくつろいでいる人などたくさんの人に会うことが出来ました。

中でも印象的だったのは、私が帰り道を歩いている時、横道から出てきた五歳くらいの女の子とおばあちゃんです。女の子は小走り、和泉川の側道に出て一度振り返り、はやくはやくと、おばあちゃんを急かすと、そこから連続する水辺の斜面を下り



■二ツ橋から見た和泉川

和泉川

和泉川へは、相鉄線の三ツ境駅下車して、厚木街道を西方向へ1km弱で訪れることができます。和泉川は、瀬谷区瀬谷町付近を源として、瀬谷区・泉区を南下し、戸塚区で境川に合流する延長11.5km、流域面積11.5km²で、川沿いには田畑や樹木が残り、周辺には湧水が多くみられるなど、横浜のふるさとの特徴である谷戸景観をとどめる数少ない川の一つです。

このような和泉川固有の川らしさを復元するとともに、川と人々の交流の場を創出しようと、平成三年に「ふるさとの川整備事業」の認定を受け始まったのが、「和泉川 ふるさとの川整備事業」です。事業区間は、瀬谷区の二ツ橋〜宮沢橋の2.8kmで、五力所の拠点整備されました。

地域の庭

厚木街道を西へ進んでいくと、左手に、平成十年に整備された二ツ橋の水辺が現れます。左手の樹林帯から水辺、そして右手に見える四阿へと変化に富んだ斜面が続いています。水の流れも決して直線だけではなく変化に富んでいて、遊び心が感じられます。ここから始まる和泉川の水辺に期待を抱き、つい厚木街道を離れ少し散歩して行きたくなる、そんな眺めです。

ながら、「ほら！気持ちいいよー！」とはしゃいでいました。遅れて側道に出て和泉川を見たおばあちゃんは、「あらほんと」と少し驚き、そして嬉しそうに言いました。

和泉川は、二〇〇五年には土木学会デザイン賞の最優秀賞を受賞しました。和泉川の水辺の気持ち良さは、女の子にだけでなく、審査員にも伝わったのでしょうか。心地よさの価値をちゃんと評価した、そんな河川整備だなと感じました。

和泉川を二時間ほど散策しましたが、つい仕事を忘れてリラックスしてしまい、昼寝をしたい誘惑を断ち切るのに大変でした。もう少し気温が高かったら危なかったかもしれません。出来れば天気の良い日に、みなさんも是非一度、訪れてみて下さい。気持ちいいですから。「あらほんと」と言ってしまうことうけあい

【参考文献】

『宮沢遊水地』と4つの水辺拠点』横浜市環境創造局



■記念に一枚、和泉川と僕

みんなで考えみんなでつくる道路整備

若松—まず自己紹介をお願いします。

楠本—社会創造事業部長をしております。楠本と申します。道路・交通計画を中心に二十五年です。

若松—今回の潮来バイパス整備計画を作成する際にPー手法（パブリックインボルブメント）を用いたとのことですが、その理由をご説明願います。

楠本—潮来バイパス計画を進めるに当たって、他の高規格道路の計画との整合性もあり、本バイパスに対して住民の方が整備の必要性を感じているか、必要としている機能とは何なのかを吸い上げて、早期に計画を進めたいとの意向がありました。その中でPー手法を考えました。その中でPー手法を考えたわけですが、**若松**—それでは具体的にどのような



■ニュースレター

若松—今回の手法を用いて良かったと思われること、成果として挙げられる点は何でしょうか。

楠本—先ほども述べましたが、沿道の方々はもと

とをされたのですか

楠本—潮来地区には幹線道路計画検討会があり、並行していろいろな討議がなされていきました。

しかし、検討会には住民の方がいなかったため、情報の伝達が検討会から住民の方に一方通行とならないように配慮しました。そこで、住民の方の意見をいかに反映するかに力点を置きました。

具体的にはニュースレターを月一回発行しました。また、道の駅潮来にオープンハウスを開設して、自由にご意見をいただけるようにしました。

若松—苦勞された点は何でしょうか。

楠本—正直に言って月一回のニュースレターの発行は大変タイトな作業でした。それとオープンハウスの開設日が大雪で入場者の入りを心配しましたが、幸いにも大変多くの方に



大日本コンサルタント株式会社
執行役員 社会創造事業部長 楠本 良徳さん

住民意見を踏まえた国道51号潮来バイパスの整備計画

発注者：関東地方整備局

聞き手：広報委員会 若松 考至



■オープンハウスの開催風景



■展示パネル

より、遠く離れた元住民の方からも様々なご意見を頂戴することができ、計画のプライオリティーが良く掴めました。その結果、事業の進行が早まり、発注者にもお褒めを頂きました。

若松—単にPー手法と言っても工夫次第で大きな成果に結びつくことが分かりました。

ありがとうございました。



橋長760mの鋼3径間連続トラス・ボックス複合橋。上部構造のデザインは港の景観として特徴的なガントリークレーンをイメージしたもので、長大橋梁の構造としては世界に類が無く東京港の玄関口に相応しいゲート性とモニュメンタル性を備えた美しいデザインとなっている。

記憶に残る橋を目指して

若松—まず自己紹介をお願いします。

糸井—東京事業本部橋梁部に所属している糸井です。橋梁一筋に二十年以上です。

若松—東京港臨海道路臨海大橋の基本設計を実施されたとのことですが、技術的な特徴などをお話しいただけますか。

糸井—この橋梁の特徴は、支間中央付近でトラス桁が箱桁を支持しているところ。平成元年当時、東京工業大学の中村先生が中心となられた景観委員会で決定されました。その後、阪神淡路地震を経て、箱桁を支持しているゲルバー構造の耐震性に対する疑問の声が浮上し、通常の連続トラス形式に変更されようとする

る時期もありました。しかし、「東京湾にここにしかない美しいデザインの橋梁を造ることも重要」とした委員の意見もあり、この形態は維持されトラス桁と箱桁を剛結・連続化し耐震性の向上を図ることになりました。トラス桁と箱桁では構造特性が大きく異なるため、その連続化は難しく、FEM解析を用いた局部応力の定量化とこれらを減少させる構造詳細の検討を行い、連続化が可能になりました。

本橋梁には、他にも多くの新技術を採用しています。

上部工構造計画では荷重抵抗係数設計法（LRFD）を採用し、使用鋼材には、最近開発されたBHS鋼材（橋梁用高性能鋼材）を採用しました。おそらく、日本で最初の採用ではないかと思っています。下部工構造計画では、鋼管矢板井筒基礎の継手に綫鋼管継手を採用して杭本数を三十五％削減することができました。これは採用実績が無い継手でしたので、耐力試験を実施し委員会での審議を経て各種設計常数を設定して設計を行っています。

耐震設計では、長大橋梁としては日本で最初と思いますが、すべり型免震支承による免震設計を採用しています。

若松—新しい試みを沢山された中で品質面の確保も重要ですが。

糸井—ミスをエラー対策については、作業過程でのリスクの回避を心掛けました。つまり、極端に時間の短い

作業を避けるような作業工程を調整したり、間違いない計算方法の採用や作図における寸法系の簡略化等です。また、今回は学識経験者による第三者チェックも実施いたしました。

若松—今回は糸井さんにとっても貴重な経験をされたようですが、設計技術者として後進の技術者への伝承や教育についてはどの様にお考えですか。

糸井—今回の固有の伝承というよりも日ごろ心掛けていることは、「不明な点をうやむやにしない」といったところを指導しています。技術者にとって不明点を解決しないで先に進むと新たな技術に到達しないように思っています。

若松—なるほど、技術屋さんらしい着眼点ですね。

ところで糸井さんご自身がこの経験を活かして今後どの様になりたいですか。

糸井—今回の業務を通じて新技術、実験、ランドマーク的な景観などという経験できました。今までにない自信をつけることができました。とかく橋梁設計では実績重視となりがちですが、マニュアル的でない設計も経験していきたいと思っています。新技術に挑戦することの楽しさ、充実感を今後も挑戦する中で味わって行きたいと思っています。

若松—技術者としての熱いお話、ありがとうございます。

編集後記

関東支部の新しい広報誌を作ろう！
という意気込みで、創刊した「グローバル関東」。
協会会員だけでなく、広く一般の方々に読んでもらえることを目指した一冊です。
創刊号ということもあり、執筆者を始めとするご協力を仰いだ方々に本誌のイメージを
如何に伝えるかに苦心しました。
その分、形となった本誌を手にとると、ある種、感慨深いものがあります。

今回は“これからの東京”をテーマに、新しい構想や計画、次代に残したい東京の魅力
について特集しました。
オリンピック東京開催、2011年度完成予定の高さ610mの新東京タワー、地球環境時代
の庭園都市・東京の再生について紹介しておりますが、今後、どのようなまちづくりが
なされて行くのか楽しみなところ です。
また、我々建設コンサルタントで働く技術者を紹介する業務インタビューでは、記憶と
記録に残る仕事をしようとする想いを熱く語って頂いています。

余談ですが、座談会で紹介した「オリンピックを望む学生の会」の全国縦断オリンピッ
クキャラバン出発式には、来賓で元気に挨拶している荻原議員の姿が。聞けば、今回の
座談会が縁となって、この出発式での挨拶に繋がったとのこと。図らずも本誌が良き出
会いの触媒になったことを知って、大変嬉しく思いました。

本誌もこれが創刊号で、いわば出発式のようなもの。ささやかな広報誌ですが、いろい
ろなことがあり、沢山の人の出会い、そして助けられました。本誌の発行は関東支部が
踏み出した小さな一歩ですが、沢山の人の思いが詰まった一歩です。
一歩、また一歩と歩みを重ね、次第に大きく踏み出し、足を早め、そして疾走し、いつ
の日か大きくジャンプ出来ることを夢見て、歩み続けていきたいと思ひます。

【グローバル関東 制作者】

広報委員会

委員長	木嶋 光宏	八千代エンジニアリング(株)
副委員長	浅野 泰弘	セントラルコンサルタント(株)
副委員長	高築 勲	(株)長大
委員	稲田 栄作	東京コンサルタンツ(株)
委員	遠藤 徹也	大日本コンサルタント(株)
委員	小川 考一	(株)近代設計
委員	笹原 圭二郎	(株)復建エンジニアリング
委員	民岡 順朗	(株)オリエンタルコンサルタンツ
委員	若松 孝至	(株)建設環境研究所

技術委員会ビジョンワーキング

ワーキング主査	高松 治	大日本コンサルタント(株)
委員	武藤 真澄	日本工営(株)
委員	石沢 克信	八千代エンジニアリング(株)
委員	後藤 晃	(株)近代設計
委員	辻阪 吟子	(株)ブレック研究所
委員	松本 秀樹	日本水工設計(株)
委員	三沢 隆治	(株)建設技術研究所

グローバル関東 Vol.1 January 2008

発行日 平成20年1月1日発行

編集 広報委員会／技術委員会

発行 JCCA 社団法人 建設コンサルタンツ協会 関東支部
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-10 松楠ビル4階
Phone・・・03-5297-5951 Fax・・・03-5297-5952
http://www.jcca-kt.jp

レイアウト制作印刷 株式会社 大 應

支部長挨拶

平成十九年度より支部長を務
めております友澤武昭でござい
ます。関係者の皆様におかれま
しては、日頃より関東支部の活
動に格別のご理解とご協力をい
ただき、心より感謝申し上げます。

関東支部は、一九六八年に
(社)建設コンサルタンツ協会の
関東地区協議会として発足し、
今年はまだに四十の坂を越える
ところでございます。

近年、安全・安心、循環型社
会、環境、防災、景観等の多様
な価値観や質の高い希求などが
広がっており、国民・
市民の方々の意識にも
大きな変化がみられま
す。

現在、関東支部の活
動は中期行動計画「関
東グローバルビジョ
ン」を軸に推進されて
おりますが、中でも市
民の方々に向けた情報
発信活動の強化に努め
ております。これから



の社会インフラは、これを利用
しその価値を享受する市民の
方々の真の思いを理解し、一緒
に考え、整備・運用していくこ
とが重要であります。そのため
にも、私達からの情報発信が必
要と考えております。
このような趣旨のもと、この
度、新広報誌「グローバル関東」
を創刊いたしました。創刊号は、
東京をテーマにしましたが、順
次、関東の各地域をテーマに取
り上げてゆく予定です。会員・
大学・行政はもとより広く市民
の方々にもご一読頂ければ幸い
です。



■ 事務所開きの様子

事務局だより

関東支部事務局は花里事務局長
以下三名で支部活動をバックアッ
プしています。

関東支部は、平成十八年八月に、
昭和五十年より三十余年間おりま
した信濃町より神田に移転しまし
た。

神田は、昔より「お祭りの街・
神田」と言われ、四季折々のお祭
りが開催されています。中でも、
日本三大祭りに数えられる「神田
明神」のお祭りである「神田祭り」
が有名です。この祭りは、武蔵の
国の豪族であった平将門を祭神と
し、江戸時代には赤坂の山王神社
と江戸を二分する天下祭りと言わ
れて、この頃より全国的に有名と
なり、二年に一度開催されます。

その他にも皆さんご存じの「銭
形平次」は小説の中では、神田明
神下の台所町に住んでいると設定
されています。

「アド街ック天国」風に表現すれ
ば、「粋な街―神田」であり、私
たち事務局はさながら神田の粋な
四人衆といったところでしょうか。

祭りと言えば、今年は大きなイ
ベント、関東支部創立四十周年が
あります。粋でいなせな四十周年
になるように事務局一同頑張っ
ていこうと思っています。会員各位
はもとより、本誌をご覧きまし
た方々、粋な関東支部を以後、お
見知りおきを。